

語り手と視点—村上春樹「タイランド」

西田谷 洋

一 語り手の位置

物語は「一・二名あるいは数名の（多少なりとも顕在的な）語り手によって、一・二名あるいは数名の（多少なりとも顕在的な）聞き手に伝えられる一ないしそれ以上の現実の、あるいは、虚構の事象の報告（所産と過程、物象と行為、構造と構造化としての）」¹と規定されるように、語り手／書き手から聴き手／読み手へと出来事が伝達されるテキストとして制作／受容されるジャンルと一応定義できる。

そこで、旧稿では、表現の視覚性と時制を関連づけた語りの構造を次のように整理した。

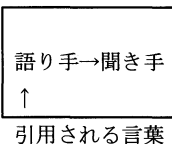
物語世界外から物語内の具体的な事象・出来事を回顧的に語るときは一貫して過去形となる。また、語り手は、物語場面のイメージを語っているので、物語場面の動的イメージはそのまま過去に位置づけられて過去形になる。その継続として、過去の事象・出来事と理解されるコンテキストで物語場面の状況・順序等の説明を挟むときに、動作がスキーマ化され、自然に完成相を用いた歴史的現在になる。²

旧稿では、物語テキストと話し言葉は同じ認知能力を基盤として生成されるという考え方を前提としていた。日常会話・日常言語と物語・文学言語とは発話／語りの構造は異なるが、前者から後者への派生が生じていると考えられるからである。

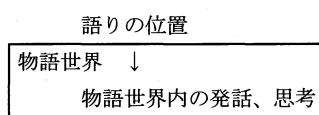
会話における対話では話し手はその時空間での事象・経験を直接言及し、会話物語では以前に得られた直接的意識を想像あるいは想起して言語化する、そして書かれた詩や物語では経験してない事象も以前言葉やイメージで受容したことも想像して語ることもできる。同様に、引用が話し言葉から書き言葉、小説へと展開したという山口治彦『明晰な引用、しなやかな引用』（くろしお出版二〇〇九・一二）もこうした考えを裏付けよう。

橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学』（水声社二〇一四・九）はナラトロジーでは語りは機能に過ぎず、日本の物語論者は語り手論になり、語りの位置が語り手の現在として実体化されているが、話し言葉の語る現在の私と語られる過去の私／出来事という同一性が小説の物語では成り立たないとして、語りの構造を二種類に整理する。³

〔現実の会話〕



〔物語〕



橋本氏は、発話者と出来事との表現関係は、話し言葉では発話の位置と語られる出来事

とが同一時間軸に並んでいるのに対し、物語では語られる出来事と「語りの位置は同一時間軸上にあるのではなく、物語世界の外側にありながら、漸進的に眺めながら語っている」⁴と指摘し、その関係を「脱同一時間化」⁵と呼ぶ。

これは、牧野成一「物語の文章における時制の転換」(『言語』一九八三・一二)の空間・統括・絵画化説、樋口万里子「Viewing HP and the Present Tense in English」(『VIEWPOINT:認知言語学の視点』日本英語学会大会ワークショップ一九九五・一一)のイメージスキーマ説、西田谷洋『認知物語論とは何か?』(ひつじ書房二〇〇六・六)の参照点のフレームモデルとも対応しよう。

さて、橋本氏も指摘するように、類型はあくまで類型であり、小説言語において現実の話し手のような人格的な言表行為主体が存在しないと断定するのは一人称小説や無人称の語り手を想起すると難しく、日常コミュニケーションの会話物語から、非日常コミュニケーションの書かれた物語へと物語が派生展開してきたとすれば、二類型の間には段階性・程度性の異なりがある。とするならば、物語現在が語り手になるのではなく、物語行為の帰結として語り手や話者がありそれが物語現在へと展開したと想定されよう。

また、橋本氏は、物語構造について物語行為の基点となる語りの位置は「永遠の「いま、ここ」」であり、「現存のいま、ここ」、「ある一つの具体的な時空間に位置づけられているわけではない」⁶。むろん、人格化された語り手が存在しない物語があることと、そうした物語を生成する基点やそれによって作られたとされる物語が無色・透明・公正・中立・客観であることとは別である。物語解釈とはそうした観点から語り手ないし語る位置と語られる出来事という、断片と断片の表現性／関係性／構成性を利用する方法なのである。

この点で、物語世界内の出来事がいかに語られ、表現されたか、そして、いかに構築されたかというアプローチは重要である。そこで、本稿では、村上春樹「タイランド」(『新潮』一九九九・一一)を素材として、旧稿の視点の参照点モデルを改めて整理し、自由間接話法と視点の関連を検討し、「タイランド」の先行論が持たない視点から物語解釈を行う。

二 物語のスキヤニング

ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』(水声社一九八五・九)は、物語世界の情報の再現量の制御を示す焦点化概念を提示し「だれが語っているか」という語り手の語りと「だれが見ているか」という登場人物の視点というレベル間の混同を回避しようとした。だが、焦点化が、「どのようなコンテキストにおいて、だれが見ているものとして提示されているのか」⁷、すなわち「どのように語るのか」という領域に対応する点で、ジュネットも語りと視点を混同している。

物語表現は対象に対する把握のあり方が投影されているのであり、旧稿では、視点と語りを区別せず、誰が見ているものとして提示しているかという視点と語りを統合して分析することを主張した。

さて、ミーケ・バル⁸は、物語を、語りテキスト(語り手／聴き手)・物語内容(焦点化

子／被焦点化子）・ファブラ（登場人物）に分類し、焦点化の主体と対象、すなわち焦点化子と被焦点化子を動作主として規定する。バルの焦点化は、「語りに先立って、物語世界がどのような眼差しに切り取られているのか」⁹という問題意識から、物語における意識の志向性の問題系を構成する。

村上春樹「タイランド」で主人公・さつきが見た夢では、登場人物はさつき、焦点化子はさつき、被焦点化子はさつき、うさぎ、「何か」となる。

①うさぎの夢を見た。短い夢だ。②金網がはられた小屋の中で一匹のうさぎが震えている。③時刻は真夜中で、うさぎは何かがやってくるのを予感しているようだった。彼女ははじめのうちは外からそのうさぎを観察していたのだが、④気がつくと彼女自身がうさぎになっていた。彼女はその何かの姿を、暗闇の中にほのかに認めることができた。⑤目が覚めてからも、口の中にいやな後味が残っていた。

なお、以下に、さつきの夢の中での焦点化を括弧に括って示した。

語りテキスト：語り手→物語場面→聴き手

物語内容：①Fr1→Fd1 (②③Fr1→Fd2④Fr2→Fd3) ⑤Fr1→Fd1

ファブラ：さつきがうさぎになって何かを暗闇に認める夢を見る

Fr=焦点化子 Fr1=さつき、Fr2=うさぎ

Fd=被焦点化子 Fd1=さつき、Fd2=うさぎ、Fd3=何か

焦点化子は変動し、被焦点化子が新たな焦点化子となる場合がある。この点で、バルの焦点化子論は、視点を、事態認知に際しダイクティックな固定的位置を占めるのではなく、事象に際して相対的に移動するものとして捉えている。

物語世界内／物語世界外、物語言説／物語内容との関係を視点移動説から解決するのが山岡實『「語り」の記号論増補版』（松柏社二〇〇五・一〇）である。山岡氏は、物語世界内と物語世界外との間の語り手の移動度を測定し、物語世界内では作中人物は実際に見ており、物語世界外では語り手が根元的に見ているとし、焦点化は語りに先行すると位置づけ、日本語では視点と発話点が重なりと捉える。山岡氏は「日本語の物語の場合、語り手と登場人物は融合し易く、登場人物が物語世界の現場から、眼前の出来事・状況を知覚・体験すると同時に語るという、内的独白が頻繁に行われる傾向がある」¹⁰と指摘する。物語世界内の実在・先行を主張し、融合と捉えている。

一方、オニールでは、焦点化は語りと共に物語内容が物語言説に変換される際の媒介であり、語り手や内包された作者が動作主なのに対し、焦点化子とは「選ばれた場所、物語が提示される任意の時点で、当該物語がどこから見られて提示されているかのその場所のこと」¹¹とみなす。オニールは、焦点化子の位置（物語世界内／外）・情報範囲（内／外面）

によって術語を組み替え、内的焦点化は、語り手を經由して語られるため、外的焦点化に埋め込まれた二次的焦点化だとする。この点で、内的焦点化は複合焦点化なのに対し、外的焦点化は単一焦点化となる。語り手は対象を直接焦点化することも、登場人物を通して間接的に対象を焦点化することも選択できる。次ではバルのモデルに重ねて先の「タイランド」の同じ場面を分析した。

①うさぎの夢を見た。短い夢だ。[EF(CF さつき→CO さつき)] ②金網がはられた小屋の中で一匹のうさぎが震えている。③時刻は真夜中で、うさぎは何かがやってくるのを予感しているようだった。彼女ははじめのうちは外からそのうさぎを観察していたのだが [EF(CF さつき→CO うさぎ)]、④気がつくと彼女自身がうさぎになっていた。彼女はその何かの姿を、暗闇の中にほかに認めることができた。[EF(CF うさぎ→CO 何か)] ⑤目が覚めてからも、口の中にいやな後味が残っていた。[EF(CF さつき→CO さつき)]

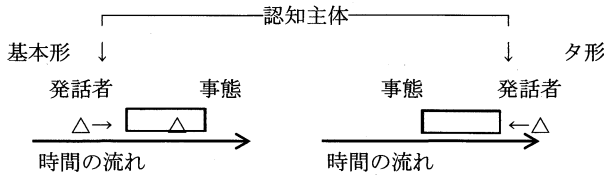
EF=外的焦点化子 CF=内的焦点化子 CO=内的被焦点化子

オニールでは、焦点化はテキストレベルで作動する。焦点化は語りのレベルに根拠を持ち、さらには内包された作者のレベルで焦点化が制御される。語る前に認知主体の心的空間で内包された作者は焦点化の時空を同定し、語りと焦点化を決定する。オニールは、厳密には全ての焦点化は「重畳し交錯する眼差しの多層性ゆえに、「複合」は、こと読者の立場からする限り、「複雑」¹²であるという理由により、複雑焦点化と呼ぶ。

ここで注目したいのはオニールとバルのモデルが意識の志向性をたどる手法へとつながることである。

それを旧稿ではスキヤニングと呼んだ。¹³スキヤニングは世界に視線を投げ掛け視線を移動することであり、ある対象(参照点)を探索の手がかりとして参照しながらターゲットに到達する参照点能力に由来する。¹⁴語り手や登場人物の視点移動を参照点である焦点化子が心的経路を移動する現象と捉えるならば、視点が参照点を制御することで物語表現が作られると考えられる。参照点からの心的接触の動きによって世界は様々に表現される。表現には認知主体の世界の事象把握/事象構築の認知プロセスが反映している。とすれば、視点と語りとは不可分なものとして説明されなければならないと考えたのである。

樋口万里子「節を超えて」(『認知コミュニケーション論』大修館書店二〇〇四・二)は、日本語表現の視点は、発話時ではなく、事態の見え方だけに関わる操作概念だとし、タ形はある一纏まりの事態の実現・生起全体を後方から見たイメージの、基本形は事態の一纏まりを前方・内側から眺めるイメージの、方向性を指示する視点を誘導する標識となるのであって、日本語では認知主体の位置は言葉には現れず、視点は語り手の場合も登場人物の場合もあり、基本形やタ形に関わるのは、ある視点と事態の相対的な時間的位置関係だけで、その視点がどこにあるかは文脈等で補う仕組みとする。



①うさぎの夢を見た。短い夢だ。②金網がはられた小屋の中で一匹のうさぎが震えている。う。③時刻は真夜中で、うさぎは何かがやってくるのを予感しているようだった。彼女ははじめのうちは外からそのうさぎを観察していたのだが、④気がつくと彼女自身がうさぎになっていたた。彼女はその何かの姿を、暗闇の中にほのかに認めることができた。⑤目が覚めてからも、口の中にいやな後味が残っていたた。

引用文で□のタ形は語り手の視点から登場人物の動作や場面状況が、下線部のタ形は登場人物のまなざしで動作の実現が、下線部の基本形は同時性やその時の状況が描かれている。樋口氏は、日本語のアスペクト・テンスシステムは話し手と事態との相対的な位置関係を示し、事態を認識し表現している主体や時間的位置はコンテキストで補うので、ル形／タ形は発話者から見て事態が相対的にどのような時間的方向にあるかを表すと指摘する。

ただし、こうした相対的な参照点の位置の混在も、認知主体の物語制作によって生成されている。私は、視点を語り手が統御するという立場を採用するため、視点は語り手に帰属し、視点人物と呼ばれる動作主は参照点であり、参照点からの視野が語り手を通して制御され则认为。語り手は、参照点を移動させることで物語世界の対象の把握の過程を描き、対象の細部が前景化されたとき対象の連続的変形の過程が描かれる。いわば、参照点からの心的接触の動きによって世界が様々に表現される。静的な参照点からはフレームとしてのパースペクティブが構築され、動的な参照点からは対象がフレームに配列され、世界とその表現が構成される。そして動的な展開は語りの原点からの時制によって捉えられ、歴史的現在や主語欠落等の日本語によく見られる過去形・非過去形混淆状態はシナリオ的な図式化、見取り図的な全体像、あるいはスクリーンを見ながら語るために生じるのである。¹⁵

三 自由間接話法と視点

自由間接話法も形態論的な有標性に囚われずに考えるならば、相互テキスト性の原理に基づけば、その言葉は様々な視点の現れとも解釈できる。

自由間接話法は、自由間接文体、体験話法、描出話法、自由間接言説、自由間接表現等と呼ばれるが、本稿では自由直接話法を含め、語り手の言葉から作中人物の言葉が感じられる表現、言い換えれば語り手と作中人物が一致すると共に距離が感じられる表現と広く定義する。山口氏は、「話法とは、引用を行うために文法化された言語手段である」¹⁶と規

定し、「語りのコンテキストにおいては、伝達節を有する直接話法と間接話法とが無標の引用形式である。その結果語りにおける自由な話法の重要度は相対的に低くなる」¹⁷と指摘する。しかし、文法形式を伴わないとしても、自由間接話法的な表現は、いわば、死喩と同じで根元的にテキスト世界は引用によって織られているとも考えられる。

もともと「タイランド」では主要登場人物との会話は物語世界では英語でやりとりされたのを話者が日本語物語として翻訳、いわば間接話法化したものと言えよう。

「ときはただいまきりゅのわるいところをひっこしております。どなたさまもおごせきにおつきのうえしとべるをおしめください」。さつきはそのときぼんやり考え事をしていたので、タイ人スチュワードがいくぶんあやしげな日本語で放送したそのメッセージの意味が解読できるまでに少し時間がかかった。当機はただ今、気流の悪いところを飛行いたしております。どなた様もお座席におつきの上、シートベルトをお締め下さい。

括弧内は発話の直接話法的な再現であろう。傍点部は、その意味をさつきが理解した点で間接話法である。しかし、もともと正しく傍点部として発話されていたスチュワードの言葉を体調の悪いさつきがよく聞き取れなかったために括弧内のように聞こえたとするれば括弧内は間接話法である。また、そもそも傍点部がスチュワードが意図した発話、発話したつもりの発話であったとすれば、再現性の基準をどこにおくかによって括弧内は間接話法でも直接話法でもありうる。さつきとスチュワードの関係性をどう捉えるかで物語内容解釈にも影響が出る場合がある。

さて、この間接・直接の区別は伝達節・引用符等の文法形式の差異や語り手／作中人物の経験・発話の直示性・口語度によって測定され、¹⁸山口氏は自由間接話法を四類型に整理する。¹⁹

		語彙的直示形式	
		保持(元発話者の視点)	変更(引用者の視点)
文法的 直示形式	保持(元発話者の視点)	I (自由直接話法)	II (逆転型自由間接話法)
	変更(引用者の視点)	III (近接型自由間接話法)	IV (遠隔型自由間接話法)

山口氏によれば、II 逆転型は例外的で破格的な用法であり、話し手と聞き手の位置取りの変化に対応するとされ、III 近接型とIV 遠隔型は登場人物に近く受け手から遠い語り手と登場人物に遠く受け手から近い語り手の違いで区別され、特に説明できる。なお、IV はエコー発話として対話の場で見られ、三人称小説のコンテキストで見られないとされ、遠隔型は、対話の場ではエコー発話によって作られるが、語りでは場面設定の調整が必要となるとされる。

また、こうした自由間接話法の要素、語り手と作中人物、元発話者と引用者、視点と参

照点の間には制御・操作の権力関係を見いだすことができる場合もある。

その夜、広い清潔なベッドの中でさつきは泣いた。彼女は自分がゆるやかに死に向かっていることを認識した。身体の中に白い堅い石が入っていることを認識した。うろこだらけの緑色の蛇が暗闇のどこかに潜んでいることを認識した。生まれなかった子どものことを思った。彼女はその子どもを抹殺し、底のない井戸に投げ込んだのだ。そして彼女は一人の男を三十年にわたって憎み続けた。男が苦悶にもだえて死ぬことを求めた。そのためには心の底で地震さえをも望んだ。ある意味では、あの地震を引き起こしたのは私だったのだ。あの男が私の心を石に変え、私の身体を石に変えたのだ。遠くの山の中では灰色の猿たちが無言のうちに彼女を見つめていた。生きることと死ぬこととは、ある意味では等価なのです、ドクター。

中村氏によれば、²⁰傍線部は内的独白の自由直接話法であるが、必ずしもさつきの発話通りの形態とは限らない点で自由間接話法でもある。波線部は主語がなく、主語が「私」なら自由間接話法、「さつき」または「彼女」なら非間接話法的な地の文となる。そして傍点部はニミットの言葉の自由直接話法であり、エコー発話に傍点によってニュアンスが付加される。

さて、引用部は、老女の占いのヴィジョンやニミットの忠告を受け入れたさつきがこれまでの人生を反省するだけでなく、震災すら自分が起こしたと考えていく場面である。語り手は、さつきを被焦点化子として死を認識させ、さつきに参照点移動して石や蛇、子供を被焦点化子として認識させる。そして語り手は再びさつきに参照点移動して墮胎と憎悪を認識させる。その点で語り手は自由間接話法を用いてさつきの受動性を強調し、老女とニミットの主張を肯定しているのである。

自由間接話法は物語においては語り手と特定／不特定の作中人物の視点が混淆するものであった。たとえ、文法形式に変更がなかったとしても直接性／間接性が変動しうるのは、いかなる視点の混淆としてその物語を解釈できるかによる。このとき、他者の視点を表現にいかに取り込むかという語り手の引用・構成の問題として自由間接話法を考えることができるだろう。

四 「タイランド」分析の視点

そもそも、「タイランド」はかつて養父にレイブされ墮胎した女医のさつきがタイで占い師の老女から、震災で死ねば良いと思っていた男は生きており、体に抱えた石を飲み込んでくれる蛇が現れる夢を待てと言われ、運転手のニミットから言葉は嘘になると過去の告白を止められる物語である。

老女の占いは、継父への憎悪・殺意・恨みと関わるらしい石を蛇が飲み込む夢を見ることで、過去への否定的な感情に囚われるより別の生き方を示唆するものでもある。なるほ

ど、その方が報復の連鎖を切断し幸せな生を送りうるであろう。暴力に報復してさらなる報復によって死ぬことと、報復を断念して生きることとは、それぞれ何らかの苦しみと幸いを伴う点でも、ニミットの言うとおり「生きることと死ぬことは等価」であろう。また、中村氏は、ニミットの言葉は「生き延びることを優先して、自らの「心の闇」を見つめることを忘れた警告である」²¹とも捉え、問題解決を物語が導く必要はないと指摘する。

しかし、導かないことが何を意味するかは考慮に値する。なぜなら、過去に受けた暴力を耐えよとは不正義を受け入れよということにもなるからである。一方、言葉は、不正義を告発し、問題解決を進めるための手段となりうる。過ちやありえないことを否定する基盤は言葉であり、自分の感情を吐露するのも言葉である。ニミットは「言葉にしてみると、それは嘘になります」とさつきの言葉を封じ、「夢を待」てとさつきに強いて、不正義を受け入れる夢への不信・否定を作り出す言葉を抑圧しているとも解釈できる。

また、久保田裕子氏は「タイランド」では「言葉は＜出来事＞を超えることはできないというというありようが顕現している」²²と捉える。北極熊の交尾の挿話やニミットの言葉は嘘になるという発言は相互コミュニケーションの断絶や表象不可能性という図式で物語解釈を行う根拠になるかもしれない。ただし、これはもう少し検討を要するだろう。

そして、久保田氏は「タイランド」のタイを「タイの文化的・歴史的記号は消去されている」²³・「無国籍な場所」²⁴と評する。なるほど、グローバリズム下の東南アジアにおいて近代的な建物内でさつきの友人達やさつきが英語で話しているのに日本語として表現されてしまい、日本人が主人公で、日本語運用者が語り手である点でそこで描かれているのはタイそのものと異なるという指摘は正しい。しかし、観光客目当ての象があふれるタイの町並みや近代的な地域のすぐそばに遅れた貧困地域があり、そうした限界の枠内で主人公・語り手の立場から見えるものが示されているとすれば、無国籍、非文化・非歴史性という指摘には再考の余地がある。

「タイランド」の「語り手は、本当のことを回避しながら語り続けるという彼女の語りの形を外側から描くことで批評性を持たせている」²⁵のではない。その都度の出来事の展開に際して、人はその時々感慨で過去の経緯を全て回想するとは限らない。また、さつきが詳細に語ろうとしたとき、ニミットは止めているのであって、さつきが回避しているのではなく、回避させられているのである。

ここで注目すべきなのはそうした言葉によって何が織りなされているかである。この物語の語り手はさつきではない。さつきに焦点化することもあるが、作中人物とは異なる。物語はさつきを参照点とする言葉と語り手からの言葉を組み合わせることで織られている。さつきは語り手によって語られ、また周囲との間のコミュニケーションがさつきをそう方向付けている。

さつきにとっての「あの男」である継父を久保田氏は「彼女の肉奥で作られた観念」であり、「男が死んでいたらさつきの観念的世界が補完され」²⁶ると、さつきがイメージに囚われていることを指摘する。なるほど、三〇年会っていない男はイメージとして想起され

るしかあるまい。だが、仮に継父が生き残った場合もさつきはイメージから逃れることはない。なぜなら、それは、老女が与えたイメージに囚われることだからである。同様に、結末の夢を待つさつきも既に老女が与えたイメージに囚われている。

元主人である宝石商から北極熊が一瞬の交尾以外は孤独な生涯を送る挿話を聞かされてニミットは「北極熊はいったい何のために生きているのですか」と問う。それに対し、宝石商は「私たちはいったい何のために生きているんだい？」と問い直す。さつきの直感が正しければ、ニミットと宝石商には同性愛的な関係があった。そして言葉を否定するニミットも、北極熊と同じく、宝石商とはディスコミュニケーションがあったことになる。

『いいかニミット。この音楽をよく聴きなさい。(略) ほら、その響きが聴き取れるだろう。熱い吐息や、心の震えが』とその方はおっしゃいました。私はその音楽を何度も繰り返して聴き、じっと耳を澄ませ、魂の響きを聞き取りました。しかしそれが本当に私が自分の耳で聴き取ったものなのかどうか、定かにはわかりません。一人の人間と長く一緒にいて、その言葉に従っていると、ある意味では一心同体のようになってしまうのです。

ニミットはジャズに対する鑑賞能力・嗜好を宝石商によって強制的に同化させられてしまっていた。このとき、ニミットにはオリジナルの視点は抑圧され上位の宝石商の視点がエージェントであるニミットの参照点を支配することにもなる。ニミットは宝石商と一心同体として生きつつ、死別してもいる。そして生きていたときも断絶がある。この点で、生と死とは等価であり、現在の、いや、宝石商が生きていた当時から、ニミットは「もう半分死んでい」るのである。

さて、久保田氏は「西欧科学の医学者がアジアの「混沌」に治癒されるというようなオリエンタリズムの構図は解体されている」²⁷と把握する。しかし、更年期障害で苦しみ、飛行機で医者が求められた時に男性開業医にしきられ、全てをニミットにまかせるように、さつきは受動的に形象されていた。そもそも理性を持った女性が言葉を封じられ超自然的な側の言葉を男によって受け入れさせられていく、すなわち文明から野生へと排除されていく点でそれは女性嫌悪的な物語でもあり、オリエンタリズムの構図は依然機能しているのである。言葉は外界に働きかける手段であり、それを否定するのは夢のイデオロギーなのである。

こうしたイデオロギー暴露を、視点論の問題として捉え直してみよう。語り手（物語現在）によって視点／参照点が操作・制御されるのであるが、操作・制御される以上、情報の範囲・視角・傾向・価値観を左右する物語世界外の（非）人格的な語り手の戦略を検討対象とすることは、物語現象の解明に寄与しうるのである。

- 1 ジェラルド・プリンス『物語論辞典』（松柏社一九九七・七）一一七頁。
 - 2 小著『語り寓意イデオロギー』（翰林書房二〇〇〇・三）七八頁。
 - 3 前掲『物語における時間と話法の比較詩学』三四一頁。
 - 4 前掲『物語における時間と話法の比較詩学』二〇七頁。
 - 5 前掲『物語における時間と話法の比較詩学』一一七頁。
 - 6 前掲『物語における時間と話法の比較詩学』四三頁。
 - 7 パトリック・オニール『言説のフィクション』（松柏社二〇〇一・二）一四三頁。
 - 8 Mieke Bal Narratology: Introduction to the Theory of Narrative. Toronto University Press, 1985.
 - 9 遠藤健一「オニールの焦点化論の可能性」（『言説のフィクション』）二五八頁。
 - 10 前掲『「語り」の記号論増補版』一四六頁。
 - 11 前掲『言説のフィクション』一一八頁。
 - 12 前掲『言説のフィクション』一三六頁。
 - 13 小著『認知物語論とは何か？』（ひつじ書房二〇〇六・六）参照。
 - 14 スキャニングを原義ではなくテキストの時空間関係の階層を転移していく主観的認知プロセスとして用いたのが、小著『テキストの修辞学』（翰林書房二〇一四・九）の分析である。
 - 15 橋本氏も、視点との関係では、「視点人物から見える状態や動作はル形を取りやすい」「この事実は、語りの位置が物語現在内部の人物の位置に移動してしまっていることを示唆する」（二〇七頁）として、「現実の会話においては、引用する場が一次的であり、引用される側は二次的であるが、物語ではこの関係が逆転する。「物語現在」の発話が通常は一次的なものとなり、伝達節のほうが二次的なものになるのである」（三二〇頁）と説く。
 - 16 前掲『明晰な引用，しなやかな引用』三頁。
 - 17 前掲『明晰な引用，しなやかな引用』一二九頁。
 - 18 中村三春氏は「日本語における直接・間接の区別は、人称や時制よりもむしろ、いわば口語度（カギ括弧で括って直接引用と見なしうるか）に依存する」（『フィクションの機構2』）ひつじ書房二〇一五・二、四三頁）と指摘する。
 - 19 「視点の現在と小説の語り」（『「内」と「外」の言語学』開拓社二〇〇九・一〇）参照。
 - 20 前掲『フィクションの機構2』四二～四四頁参照。
 - 21 前掲『フィクションの機構2』六九頁。
 - 22 「言葉は〈出来事〉を超えることができるか」（『日本文学』二〇一二・八）三一頁。
 - 23 前掲久保田論文二七頁。
 - 24 前掲久保田論文二九頁。
 - 25 前掲久保田論文二六頁。
 - 26 前掲久保田論文三〇頁。
 - 27 注24に同じ。
- 付記 本稿は日本フランス語学会（二〇一五・七・一八早稲田大学）での談話会「さまざまな視点」での発表に基づく。会場の内外でご質問・ご意見を賜った。記して謝意を表する。